

茗溪学園 中学校・高等学校

帰国生と進路指導、そして理数系進学について

教務部長 田代 淳一

今回は Study Skills から少し離れて、大学進学までの進路指導についてお話しします。

海外生・帰国生が国内の高校を卒業して大学に進学する場合、進学先に国内生との有意な差があるのでしょうか。ちょうど当誌編集長松本氏が調査を始められたようですので、大変興味深く拝見したいと思います。

受入校急増：3つの理由

INFOE の教育フェアでもよく出てくる話題に、日本の「帰国生受け入れ校」が急増しているというのがあります。なぜ急増しているか、という理由に制度上の理由、経営上の理由、そして進路指導上の理由があるという分析がよく話題になります。

制度上の理由というのは文部科学省の方針変更、つまり研究協力指定校制度をやめてどの学校も自由に「受け入れ校」を自称できるようにしたことです。

経営上の理由は言わずと知れた少子化。少ない生徒を奪い合わないように、地域ごとに私学同士の“協定”という縄張りがされているため、縄張り外の海外に募集を広げているためです。

そして進路指導上の理由というのは、昨今の大学入試制度の多様化に帰国生がうまく填まるためです。それは、ひとつは英語試験の難化、もうひとつは“日本式 AO 入試”などの自己推薦入試の拡大です。国立理系の一部難関大学を除いて、たいていの大学入試での英語の実質比重が高くなっています。それも、従来型の細かい文法や日常では絶対使わないイディオムの知識を問うようなものではなく、長文を速読して大意をつかみ自分の意見を述べるような出題傾向にありますので、それはそれで歓迎すべき方向だと思います。自己推薦入試も、自分の意見をはっきり主張できる生徒には有利です。つまり、国内生よりも帰国生に該当する生徒が多い入試です。これら3点の理由から、受け入れ態勢があ

うがなかろうが、帰国生を受け入れて生徒数を確保し（東京都では帰国生ひとりあたりに補助金まで出てしまうので尚更メリットです）、かつ彼らにとって有利な入試で合格実績を稼いでくれるとしたら、これほどいい話はありません。10年前までは帰国生受け入れの帰の字も掲げていなかった学校が急遽旗を振り始めた本音の理由です。

帰国生は英語系だけに進学？

では、本当に彼ら帰国生は「君たちは英語ができるのだから、その長所を活かして英語系（または英語入試の難易度の高い大学）に進学しなさい。」という指導に満足しているのでしょうか。

私は本校のケースでしか話ができませんが、茗溪学園ではそもそもそういう指導を行いません。当誌の調査にデータを送りましたが、たとえば理数系学部への進学者の割合は浪人も含めると約4割、これは国内生も帰国生もほぼ同じで有意な差はありません。帰国生だから語学系や国際系の学部によく進学するというのではないのです。（本誌第10号で紹介したように、彼ら帰国生のセンター試験の英語の平均点はほぼ9割であるのに、です）

高校1年生から、いわゆる「コース制」を敷いている学校ではある意味仕方ないかもしれません。この段階で理系文系に分かれ、授業科目も違ってくるようなカリキュラムでは、自分の将来像を描く前に得意科目苦手科目の側面から進路選択をせざるを得ないからです。

私たち茗溪学園の教員は経験上、子どもたちが自分の意志で将来像を描き始められるのは早くて高校1年中盤、通常は高校2年前半と考えています。そのため理系文系などのコース制は採らず、中3から様々な進路講演会で少しずつ世の中の仕組みを知らせます。高校1年前半で法廷傍聴やボランティア労働体験、職業観セミナー、農業巡検、読書会、進路講演会を経て、終盤から高校2年にかけての個人課題研究で自分の興味関心のある分野を実際に1年間研究してみて進路希望分野を絞っていくプロセスを大事にしているということは、これまでの連載で紹介してきた通りです。

ここには国内生と帰国生の差はありません。医学部、薬学部や生命科学部、電子工学部を希望する生徒の比率もまったく国内生と同じです。逆に言えば、国内生も将来の活躍の場を世界各地に求めてイメージしていますので差がでないという面もあります。国内生でも帰国生以上の英語力を身につける生徒も珍しくないので、「帰国生だから進路も英語国際系・・・」という雰囲気があったくありません。

